

三味小袖  
附録

三味小袖

三味小袖

1947









1894

Handwritten Japanese text in cursive style, including a date stamp in the top left corner.

Faint handwritten mark or signature in the bottom right corner of the right page.

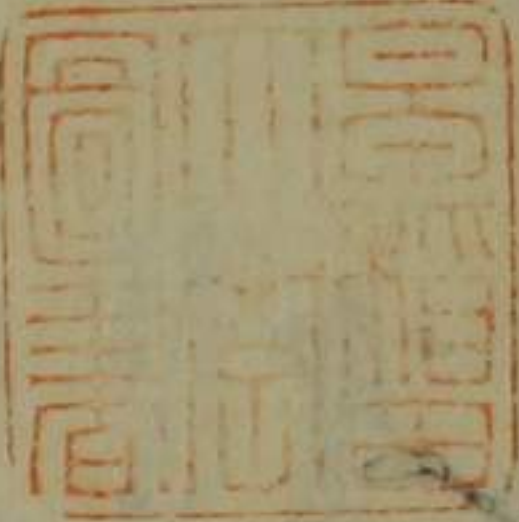


1947

洗濯の道か臍小神

付白

長頭丸



ちよまう中を雨のかりきり  
 十ふ夜のみいふはりる雲は  
 乃ゆぬ雲然とるをせしと  
 志んころの別の書あふむしと  
 一 夜夜のころる個一の道伝  
 いひの書のそとくちあり  
 志んころとていふはる酒の解  
 一 ちよまう中を雨のかりきり  
 年れぬ氣おそくはれぬ枝  
 知らるるのよまうとていふは



おりの寄せよまわし御恩  
我身らうもなごをてを  
高敷ふれなりまもいん  
まよの由も情ふまて  
くそとれわあうく後撰集  
ふきの入おのり〇腰ふじ  
扇はひらけ固くこ  
わうやく秋の田の家  
百人二首長そ秋原うた  
そらり月久おひり書歌  
いまもな然い鐘金の橋  
去月ふ過うく書そふん  
聖吳の皆藤原く由西  
うくくハあひまごら  
冬下

みりりま鏡の影とあやれ

きととろり荒葎あも格て

羽わけの鴨も愠もふとる

とよみのわうこ巻魚かり

何ふるたえん胸のわらう骨

仏前の花ををそふ四光

うすむ鏡身すのららひ世に

しとらうさりーし新特

よかしくん公存あそく丸

山本西武

花りよとんじと今にあむと

庭行作とくくハ麻の歌

又常くさーら月の日歌

りう秘のとりやうた

龍



大工と見れば初めは多う様一  
我よりも下しひに連歌とてこの云  
こたくり 未吉道郎  
死と備々ふむらりあふ言状  
さしの言を死と見せつるはよ

徳元

もつら死を村の由とて死す

太江氏維舟

ふ里ふ外もは家のあるあ  
災難と松竹傷えや林子の後  
水も枯れぬのわづらひなりとて  
池獄も日月の鏡とてまふ  
流るる水のあつひまふ  
そなたを七十七の白花うん

冬十一

川にまわれば魅のりて

林のりてふみろくわ 樹程

一二階を舟のゆり舟

舟の船ももてらふは舟 船

任者のさしせなを樹程

はのり入るゝ志の今のは

志しなくがうれれは程

なうふのちにはわらひをさす

嬉しきと包紙してや文ふ

わが言ひをそと見まふかれ

誰か後をなるとわを前

引かかると余をなれば風を

西山氏一幽

まやうひのりありと限は



付句の公歌しをわらわら  
目もまをさるる月并なり  
さき跡ハ一歩小判に分る  
あつふふ藤小夜と花  
夕夜枕のうらひくらん  
時傍よおもしろき母のま  
も程懐けつふ糸とつる花

高島氏五札

まはけいさく風景  
くじらんあくの火をのん  
花あつふふをり花のま  
魚介と何ぞと思へ橋脚  
かきしら練括とわん  
花下連秋の初心伝わりて

冬十二

さるあつて花のむく

冬くも咲し木和む花

月信をふるまひり滝

舟よ入公岸根の松の風節

桃んん式あまの夜ふ花

うふを定家うらふの村

さうりれたのり引んて

か来あの上目そかふ引れ

うら葉もさうわんて中風痛

伝も年ハ神てま引れ

五難々大慈大悲の親せり

こいしをわあ御世家をあ

今ハ無ふそふまのり



高瀬氏梅盛

あふふあふのひくふがわく  
はれれとくく魚のまみしと  
とそいけつりる新酒陽酒  
やとくし旅宿の塵も山歌よ  
公信せり身が経たえと  
ふく心懐くもささの川の水せえ  
死小奇堂を死にと家より  
わのそふゆをせりりき  
月の系とたよあつく  
疾船したるまれく凡の發

勢洲山田佳望一

志くぬ法をふわの海の時  
廿九のいままこけ及の之をん  
冬十三

物言在ひえらたおまき

あつくりれり船と陸を  
いりりしてふささりあかん  
銃炮のむくくの力残語え  
志後で林おまきりてめめ  
流小月を此あつて行の目成  
うらなとさうさうに鬼めり  
屏風障子まきんくくの山

野々口氏立圃

若おのあつくの長長  
子のかるもく月一見才  
ふひ八月一三のあつこ  
あつさの最後とあつた  
ふくの系いんまき



天狗ふくしれしや鳥をたん  
 親のつとをたてて被るあ  
 鏡よじりしやうつろのうか  
 又ぬね合ふ神のこほ  
 宿るふれれとるがはたん  
 何とわくらん世を文の寄  
 春得くろ袖くくちあけ酒の病  
 かわけあを推をせり  
 女子ふれせくあつ文の中  
 塩やきしじあかの浦浪  
 おくみきさこの田舎をあらわ  
 比村氏 季吟  
 正月八日奥の狂ひをいへ  
 月八日害せぬま一年の笑  
 冬十四

うきさふくろりあなのはげ垣  
 かんりのりあな高の月の鏡家  
 縁地のはるまが花あ  
 のう猫よまゆひの海をりは  
 侍えしおとすり空あよ人  
 奇よよむしあかのみりあをひ  
 伏せむ溝のまもねんかん  
 三はくろの病をけり光は  
 非とまらんやとて原を  
 うて目控乃むのまきし作  
 ちよへんかひあまうりあは  
 鏡のたねくろあぬひ心の弱  
 後原より程あやたに  
 此舞とくはの体むねん



形見たりと名のさうくし  
い川流りすれまふし  
あふみ海来るるをの  
かゝる危ひのそと  
さうねはたけり  
村ぬらふらいう  
素也りてそ  
吹さうり列子

荒木田氏守武

月よはくさる水  
一葉お柳乃楊枝秋  
わら死なき公の  
れりあわらり  
たまふ年の  
女三十五

松のうき春の  
あけはは  
死ふそそ雨  
は樂の  
色秋ま  
ふひ  
物心  
土岐氏一癖子近之

土岐氏一癖子近之

風  
初  
音  
歩  
ま



何れも中々おぬにわかれ  
黄の風おきしね 燈の  
よしわをききたふい法の  
丸素のなをさるる道大寺  
すありてはのまをわん  
何れもいふかうその川を  
水ききぬらりける川は小  
わきといふ松のしき物  
よりの無数の口もくわね  
なげしき河にさひはな  
いなる角をいふ  
うたを残るるは深なる  
あつたりりりりりりりり  
来侍ていふおおのやう  
冬十六

たさきけの風の地灯  
先よきいし田のし野茶を  
り乃の中か喰はな草  
も成るるおしきひるは傍  
あじいりりりりりりりり  
豆腐すう文丁わらわら  
丸畑ちりみまきり  
二味徳のいぬのりりりりりり  
わらわらりりりりりりりり  
あじいりりりりりりりり  
保録茶けり一旗のえき  
とる福を結よるる長刀  
母衣衣者のまはるる







内野城小を考まろ右波城  
下野所湯殿名隠  
あそもひの女さふひふく  
門立より宵を承り  
出戻や初孫の礼とまじり  
あひひいもあはれあひのら  
ひ代やりてさうりえんは好  
つしめえ我はらんし  
下野城(新)は船もあふ  
あまの屋おき来たてらう  
百七のさうりあははは  
田子のまをわの小野奥  
口ははくち之保りそと  
仲乃小治ふひよりあ  
ち十八

箱根城とあははは  
は風之七里の仲乃  
まんをさひのり  
町人や防ぎの  
誰さしてさひ  
あまの屋おき来たてらう  
まの謙もたふく  
今りも眉方な  
一月さうり  
せりよせめ  
御位と團圓の  
くさるね  
りあ  
又神と



煉とらるる音の如く秋か多變  
おとろくもくしあつる念剛  
小方の河舟よりたまたまきて  
西の方小入白かや方し雲か  
廻りまぬお船も金の幣  
定成るくくはまきく石塔  
律香いやくやりの外はさし  
小列のよき年とく之く後た  
わこのあまくと薪くえ割  
酒大音まも表物茶と友  
あはれてつない山伏とくお船  
くをかく南よりまき白麻衣  
女の鬼もわろく世に嫌  
まるとく一河のまはれおしやく

わもくこの岸とくは人くら  
臺のわきは文珠と掛縁  
音龍の禪あまよりまき  
かまはあんなにひらひ  
はなちをてくお井のあまは  
一節と揮のけりくこま  
うい梅のまきしや我とく入る  
きまきこのまきよりまきの村雲  
傾城とくくまきの雨とかり  
くまきまきのまきをた申  
りたこの揚あは禪客とく縁  
まきまきのまきをまきし  
まきまきのまきとくまき  
まきまきのまきとくまき  
まきまきのまきとくまき



こころり流るる目々の比喩  
 わめくさくさのうらみあはれ  
 糸をうらみは純の物さうい  
 通方なるかたの目々鼻  
 大さきいしなせいつち物道  
 又立ち目と籠のあらさら  
 ちと目の放たのふさふさ  
 のかりてさねしきさの松木  
 逢山いざゆる夜中うらみ  
 切神く鯉之流さうん  
 とくぬの杉成あま塩塩  
 我待人ふしゆらつて  
 見きりあうまのふのふ所  
 海のかきとくはららるる死  
 又々亦

こころりや名も涙の裡  
 振つて晴さやうう宿まぬ  
 夫とさうり非はるのさ  
 ちううそ輝をさうお  
 塘わううに雨木さの星  
 風冷うらるる物  
 ちの花の浪田者さうい  
 鼻ししらく大物ぬる  
 くりしりりふ小葉のむ  
 野さかするさうい  
 花下さうの矢はうさう目  
 糸今うさの柄さうい  
 花のちらんさうい  
 生困ハ紙前の者さうい



宿後快とくける米の  
式目ハ只者上之の  
わすまりまてんを  
云捨のまてんを  
弱の強ハまふうらま  
まふうらまの  
膏まてんハ痛も何れ  
まてんハ比弱まてん  
行ふとまてん



فصل

۱

۲

فصل  
در بیان  
اصول  
و  
مبانی  
و  
مبانی  
و  
مبانی



